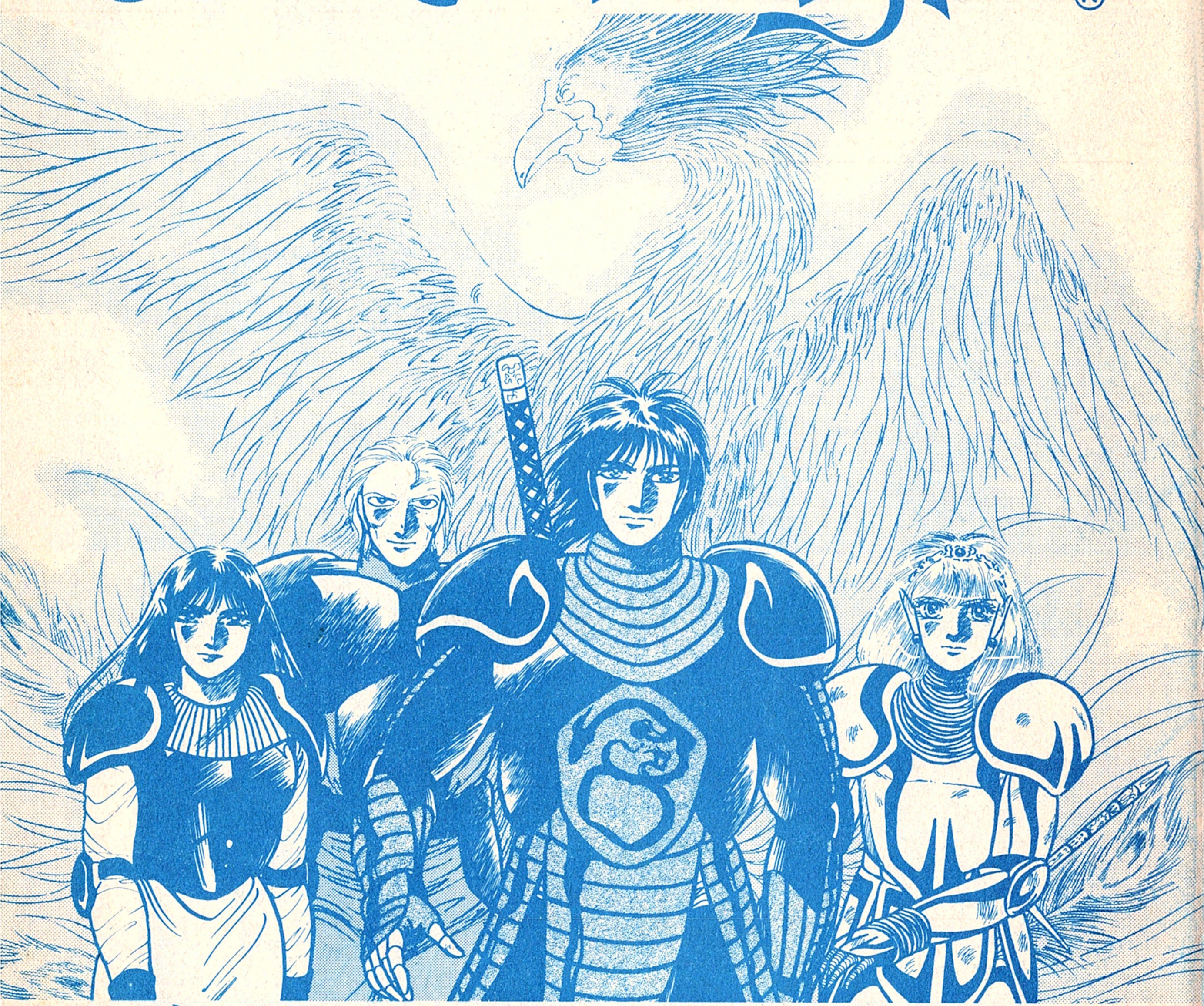
ファミコン必勝本Vol.4 ●とじこみスペシャル

Wizardry®



ウィザードリィ外伝 第2部

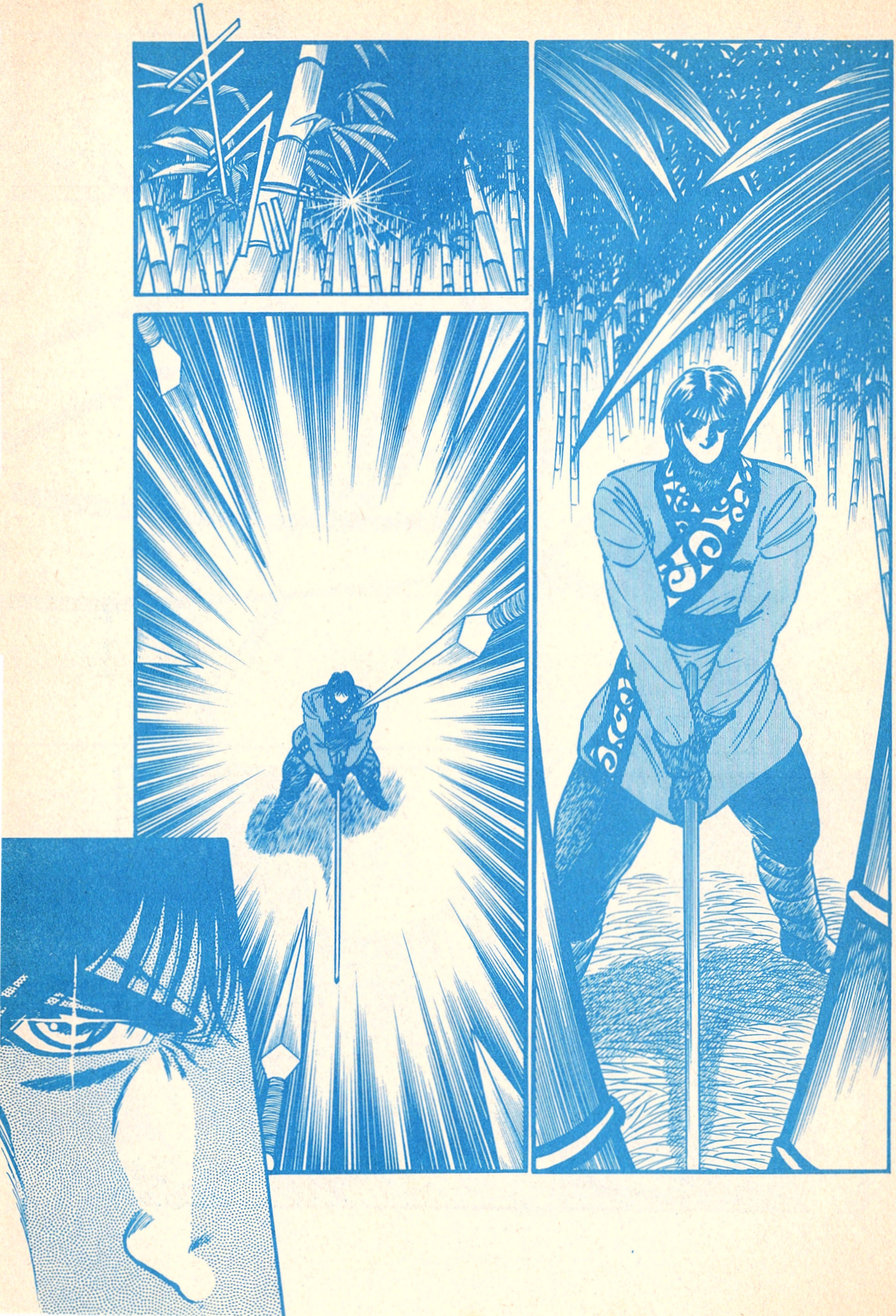
鳳凰の塔

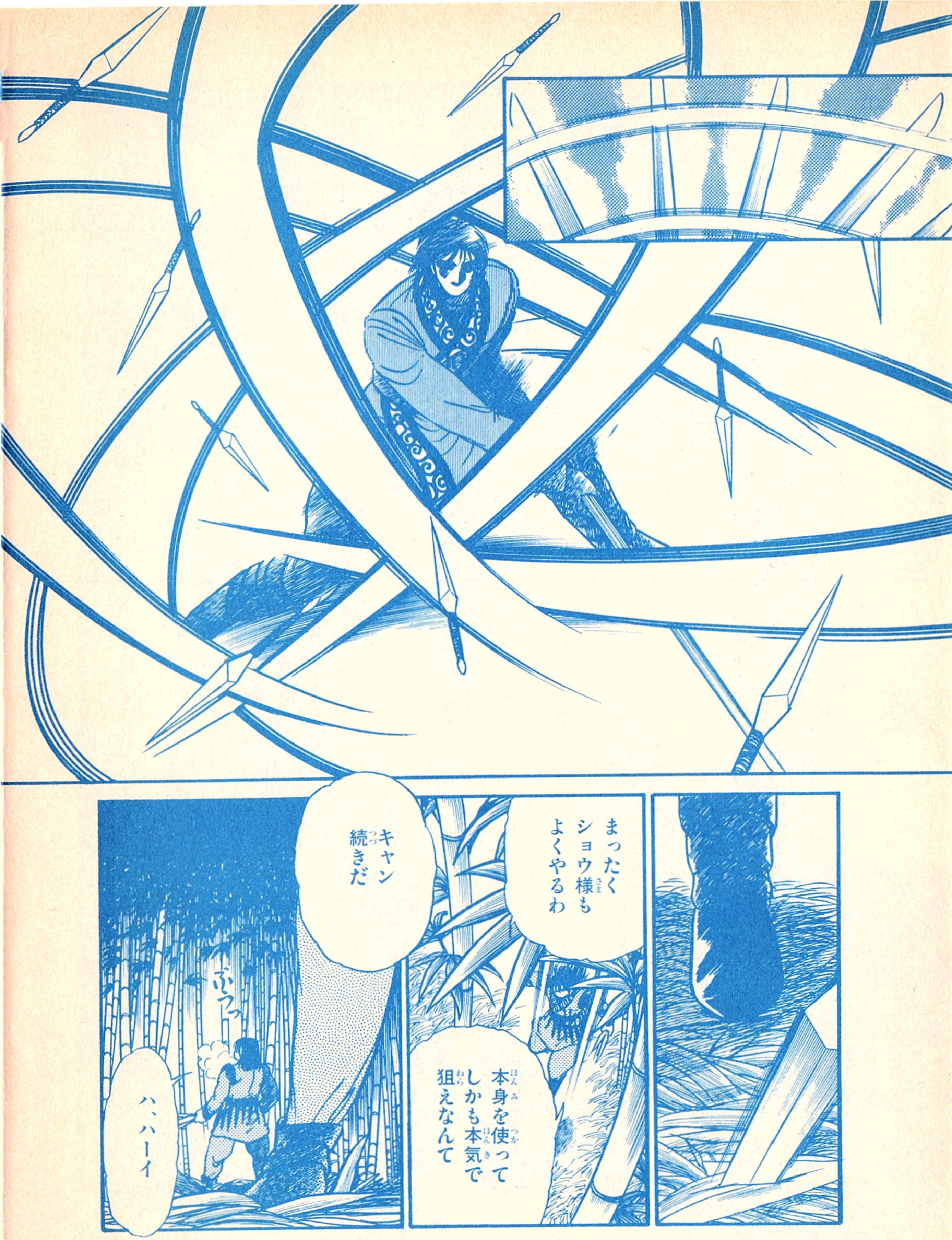
第1話「吉報」

作/石垣環

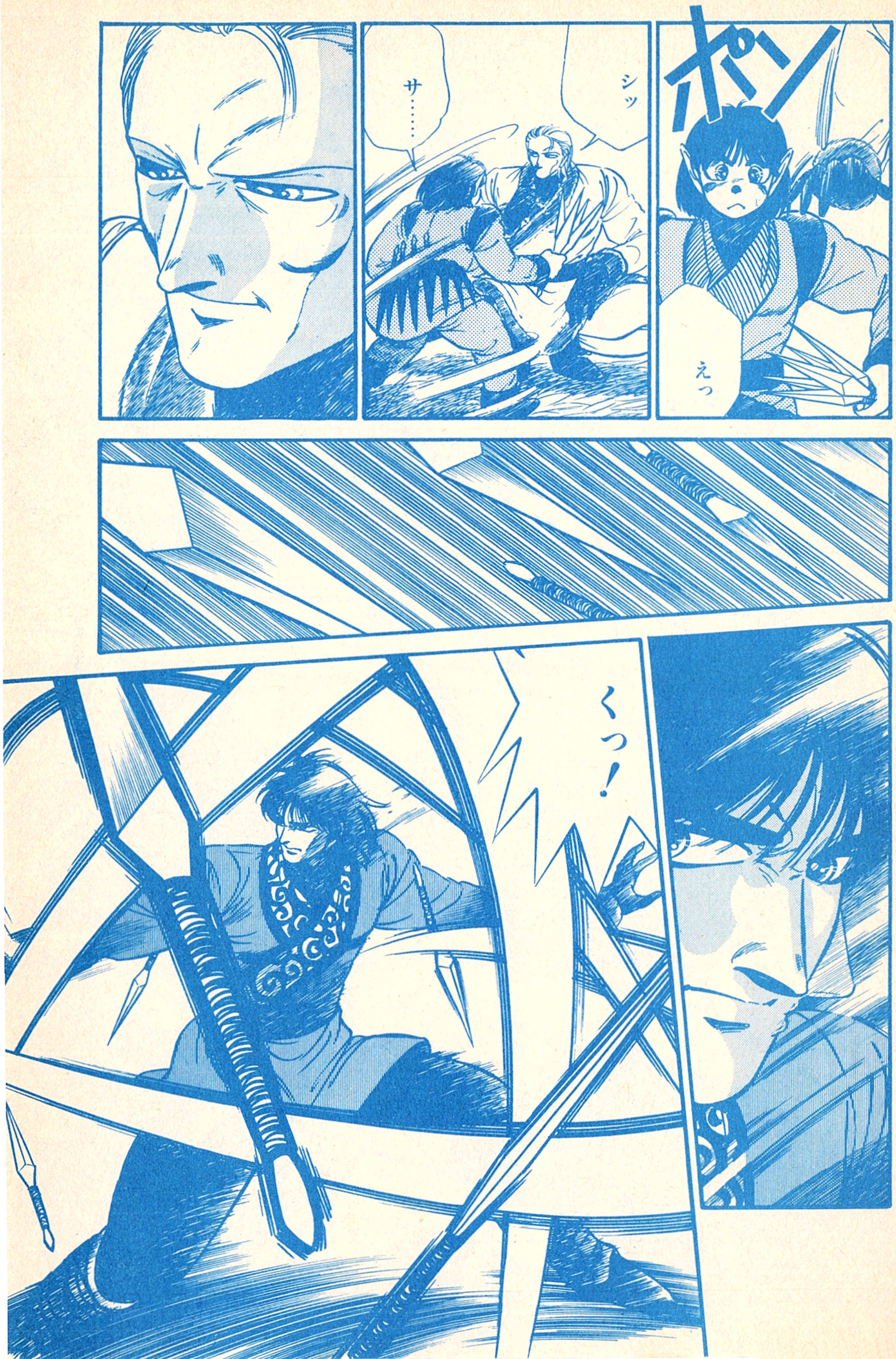
愛剣を失ったショウ。伝説の剣クサナギを求め新たな冒険が始まる！外伝第2部の開幕!!

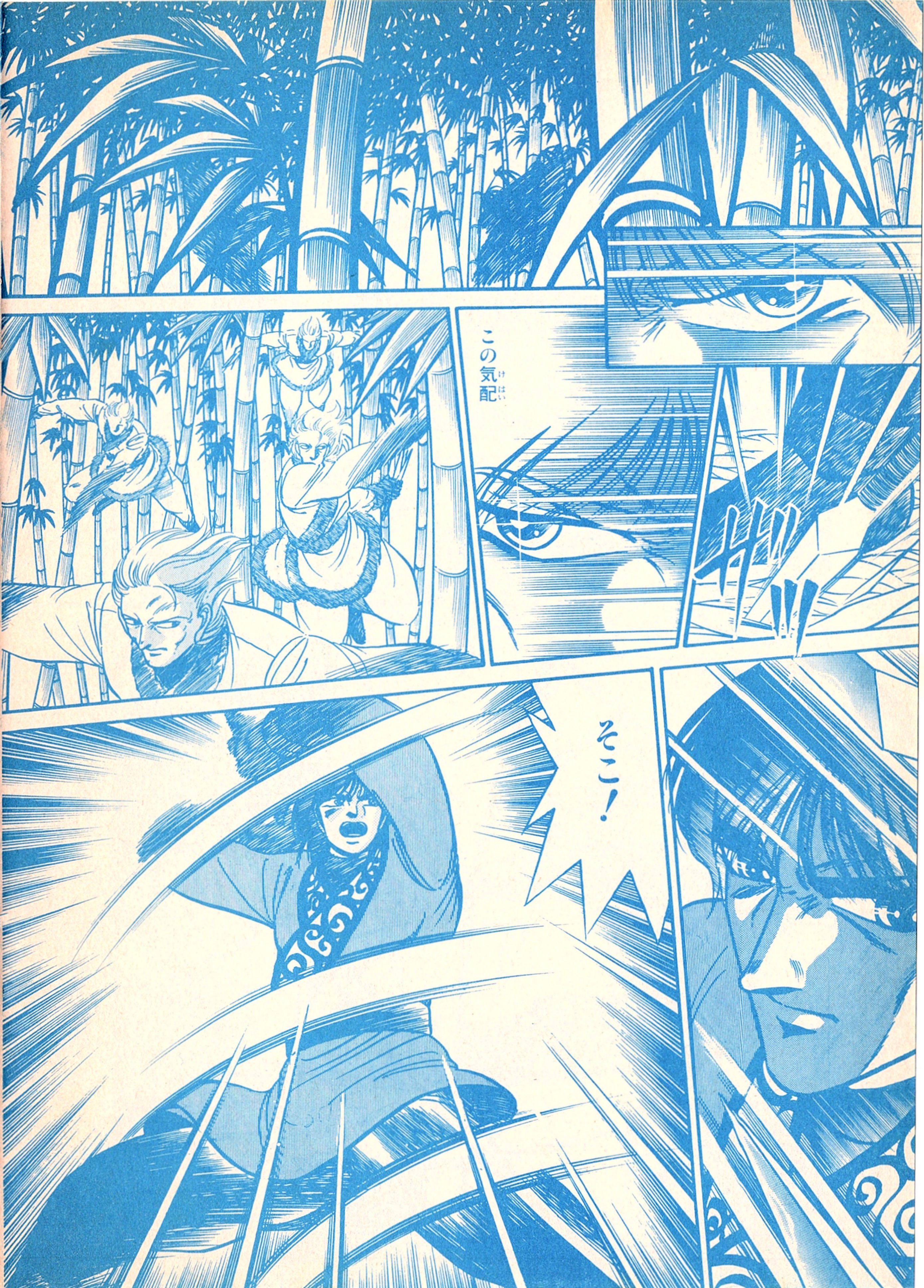

ホウライ
イヅモの国
ガサ
雪になりそうだな


キン



まったく
ショウ様も
よくやるわ
本身を使って
しかも本気で
狙えなんて
キャン
続きだ
ふっっ
ハ、ハーイ


ポン
えっ
シッ
サ……
くっ！


この気配
ザッ!!!
そこ!

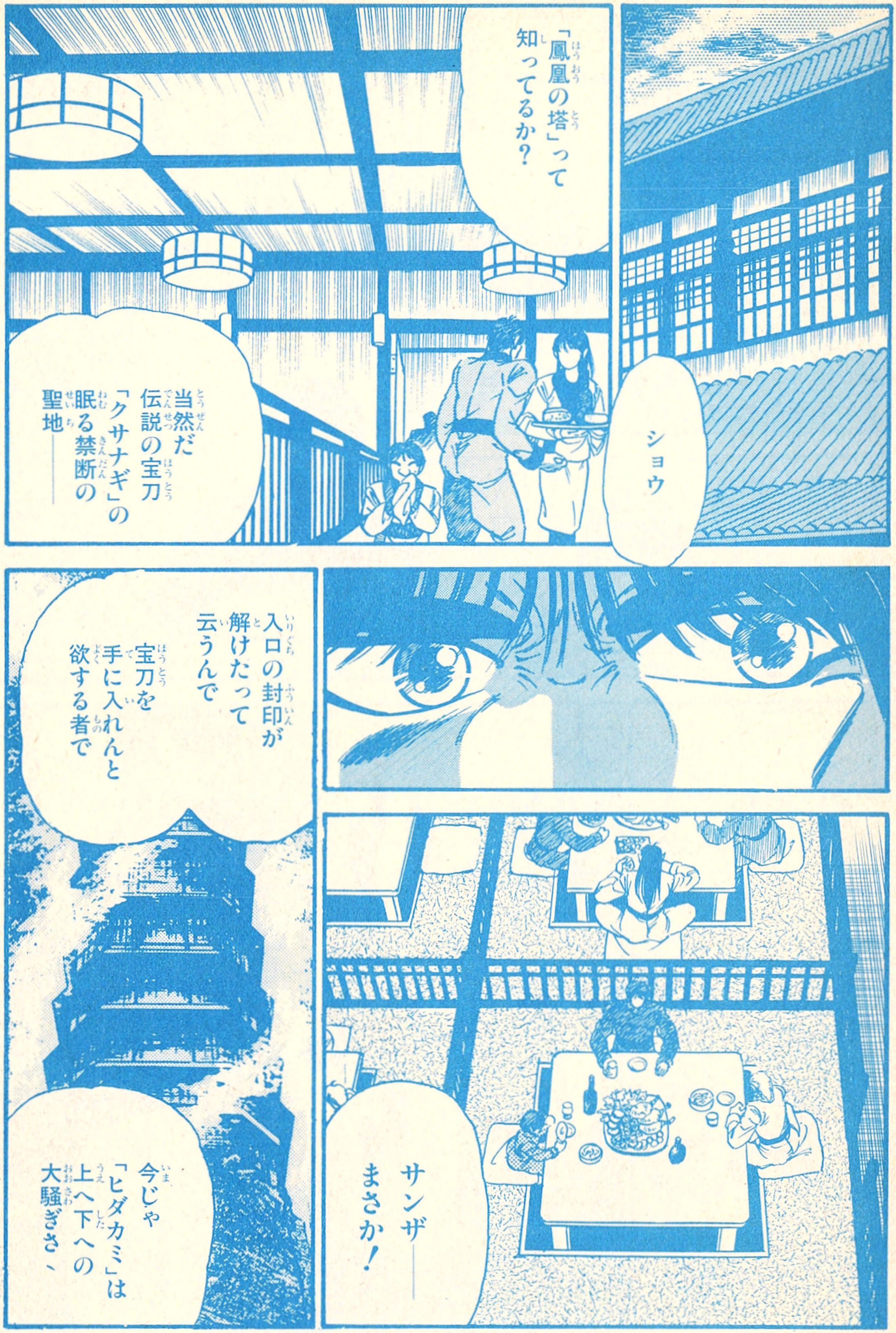

鳳龍曲流波
ゾッ
何！


タン
シュウウウウ
クッ
久しぶりだなサンザ
着地点を狙うなんざ
何云ってる途中でキャンと交代して俺を狙ったくせに
冗談が過ぎるぜショウ


キャンじゃ相手にならんだろ
ところで今のもホウリュウ家の剣術の一つかい
ごめんなさいショウ様
まあな
そもそも侍の剣術の極意は「気」の制御にあり
それがわが家の金言だからな
戦士やロードの剣術は「気」の爆発的な放出 忍者の剣術は「気」の集中
…そこが違いだ 分かるかキャン
まっその内解るさ
オレより素質は良いんだからな



*「ホウライ」は20数ヶ国の小国からなる連合国家である。各国々の統治者は、侍の身分であるが、「殿」「領主様」と呼称される。「ホウライ」全体を束ねる盟主はロードの身分であり「王」と称される。但し、この時代は「王」不在の時代であり、「ホウライ」自体は分裂状態である。

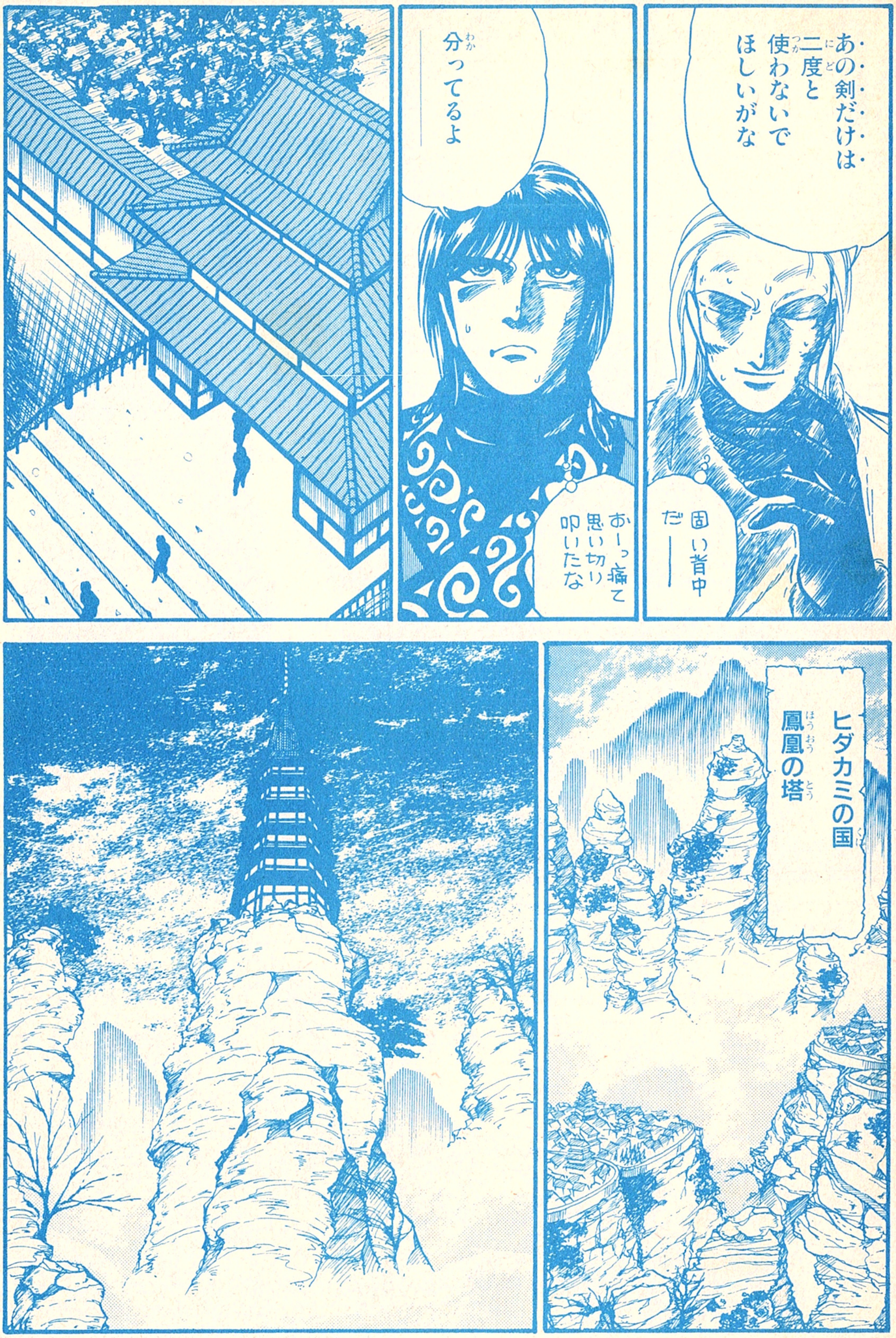

「鳳凰の塔」って知ってるか?
ショウ
当然だ 伝説の宝刀「クサナギ」の眠る禁断の聖地――
入口の封印が解けたって云うんで 宝刀を手に入れんと欲する者で
サンザ―― まさか!
今じゃ「ヒダカミ」は上へ下への大騒ぎさ、

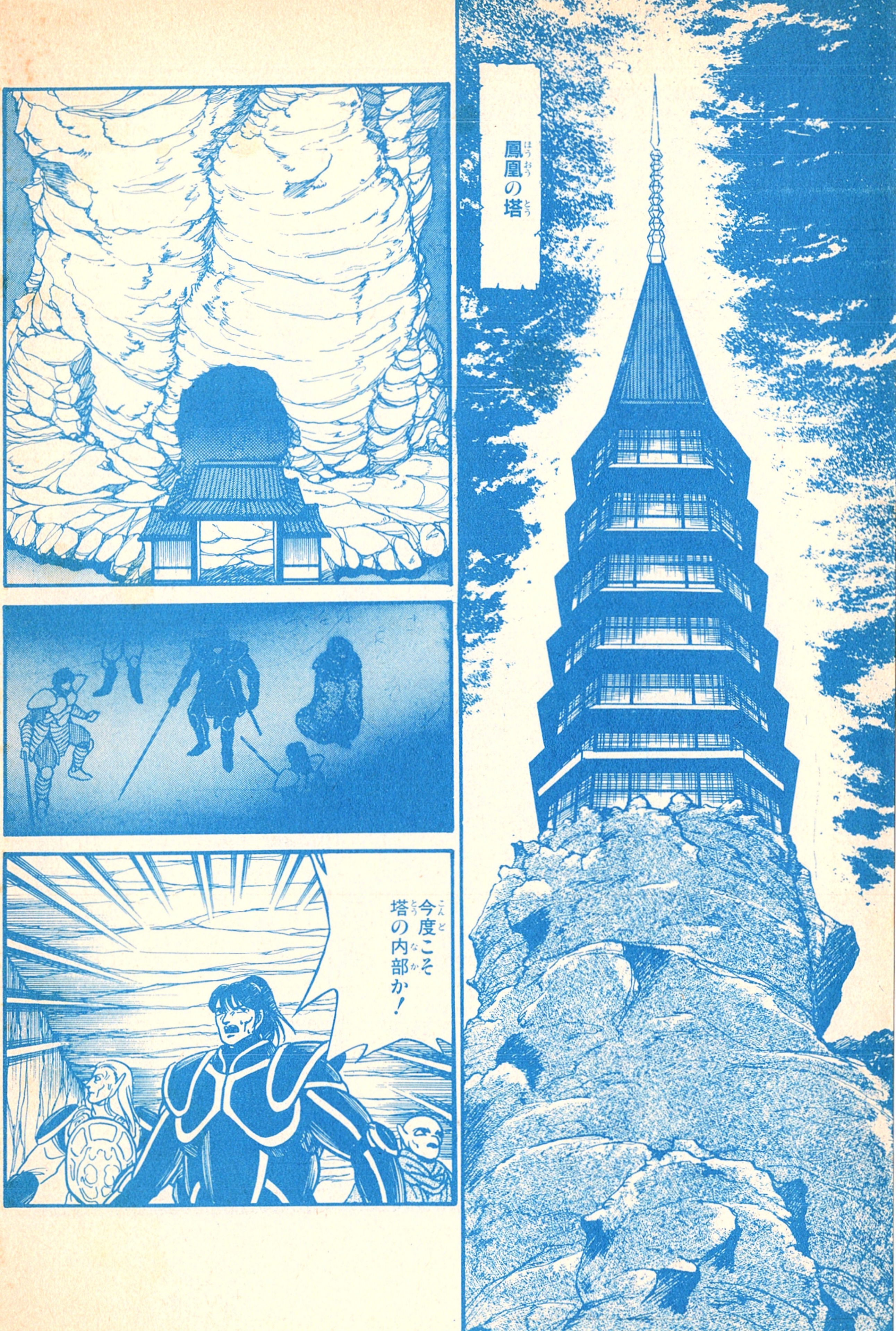

国許じゃ何とか情報を抑えようとしてるが各国に伝わるのも時間の問題だろ
どうだショウ行くか?
パクパク
パクパク
よく分んないや
じゃあなキャン
ハイ、ごちそうさまでした
どうしたんだショウ新しい刀欲しがっていたじゃないか?



確かにな
今使ってる「兼光」も悪くはないけど——
ギルと戦った時の「一文字」と比較するとやはり二段階は落ちるしね
まあ「兼光」でも「カシナート」よりは・多少まし・だけどね
「村正」でもあればね
でも「クサナギ」もすげーんだろ 何せ宝剣って云われるくらいだから
炎を裂き風を斬り氷雪を砕く
そう伝えられてはいるけど
伝説ではね


もう一つ言い伝えがあって
力及ばぬ者が「クサナギ」を手にした時
その者は滅びの道を歩む――
とね
気にすることはないさ！
ドン
お前ほどの腕を持っていりゃ合格だよ！
なにせ空間を切り裂いちまうほどだからな

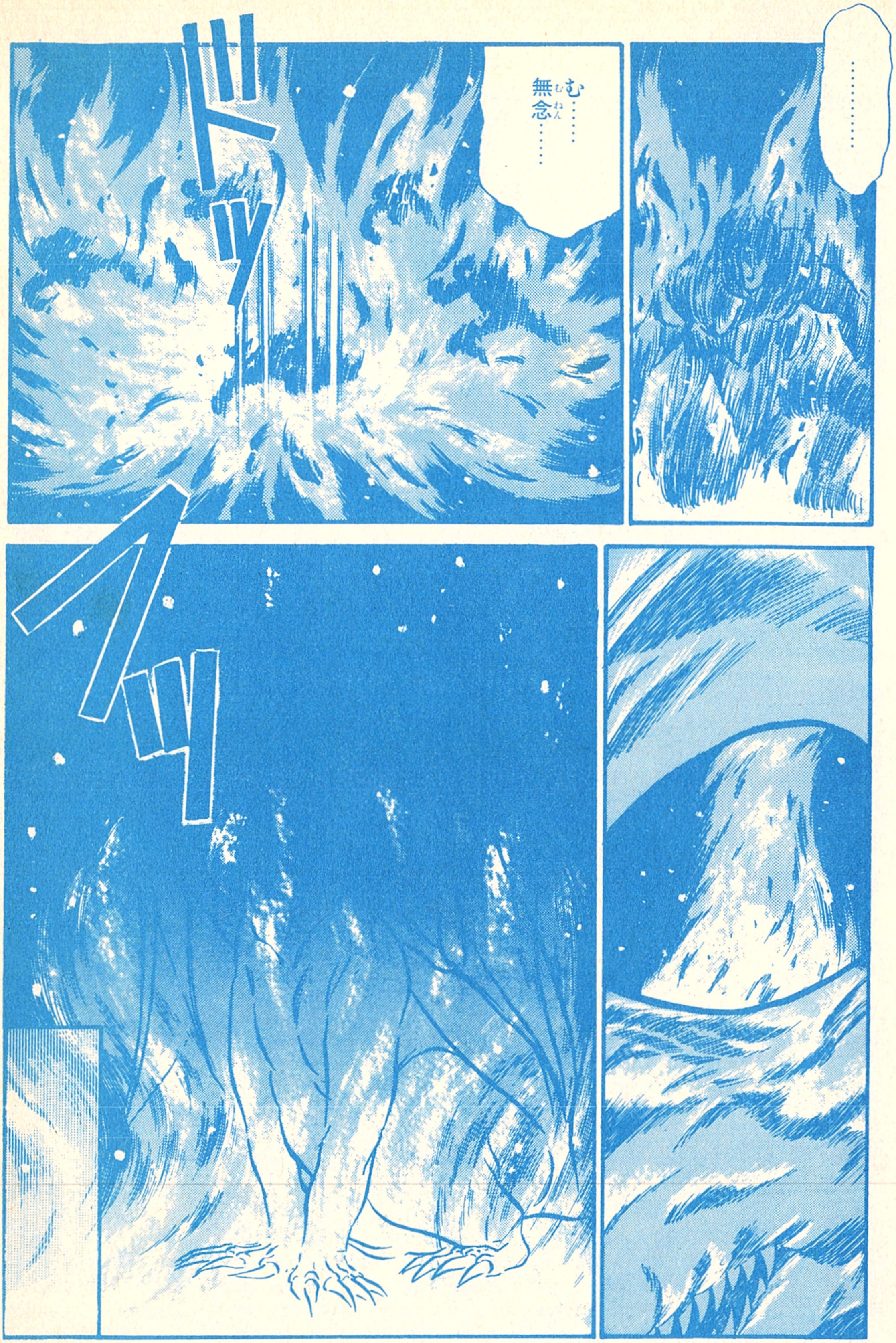

・・・・・・あの剣だけは二度と使わないでほしいがな
固い背中だ――
分ってるよ
おーっ痛て思い切り叩いたな
ヒダカミの国
鳳凰の塔

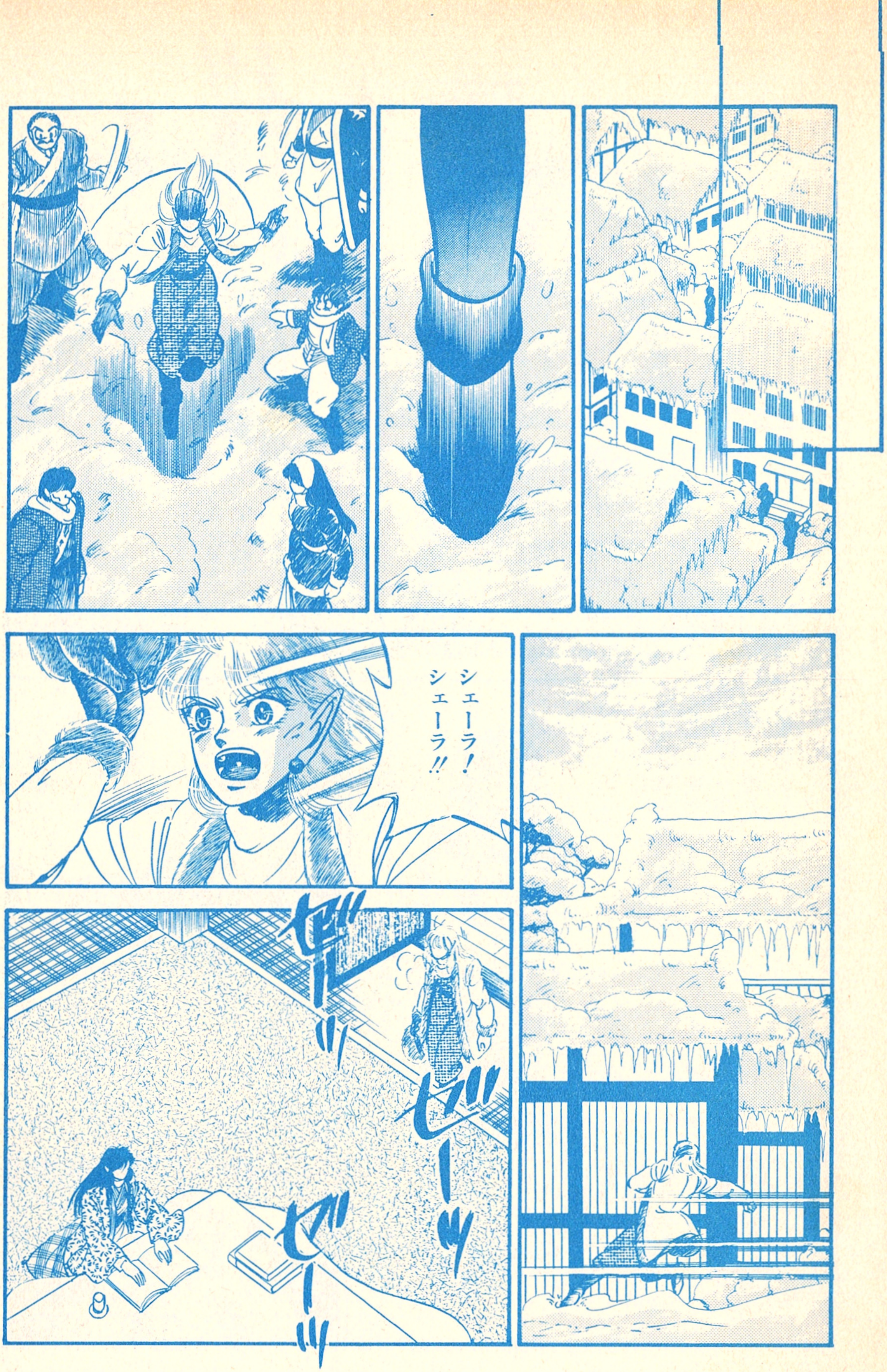

鳳凰の塔
今度こそ塔の内部か！

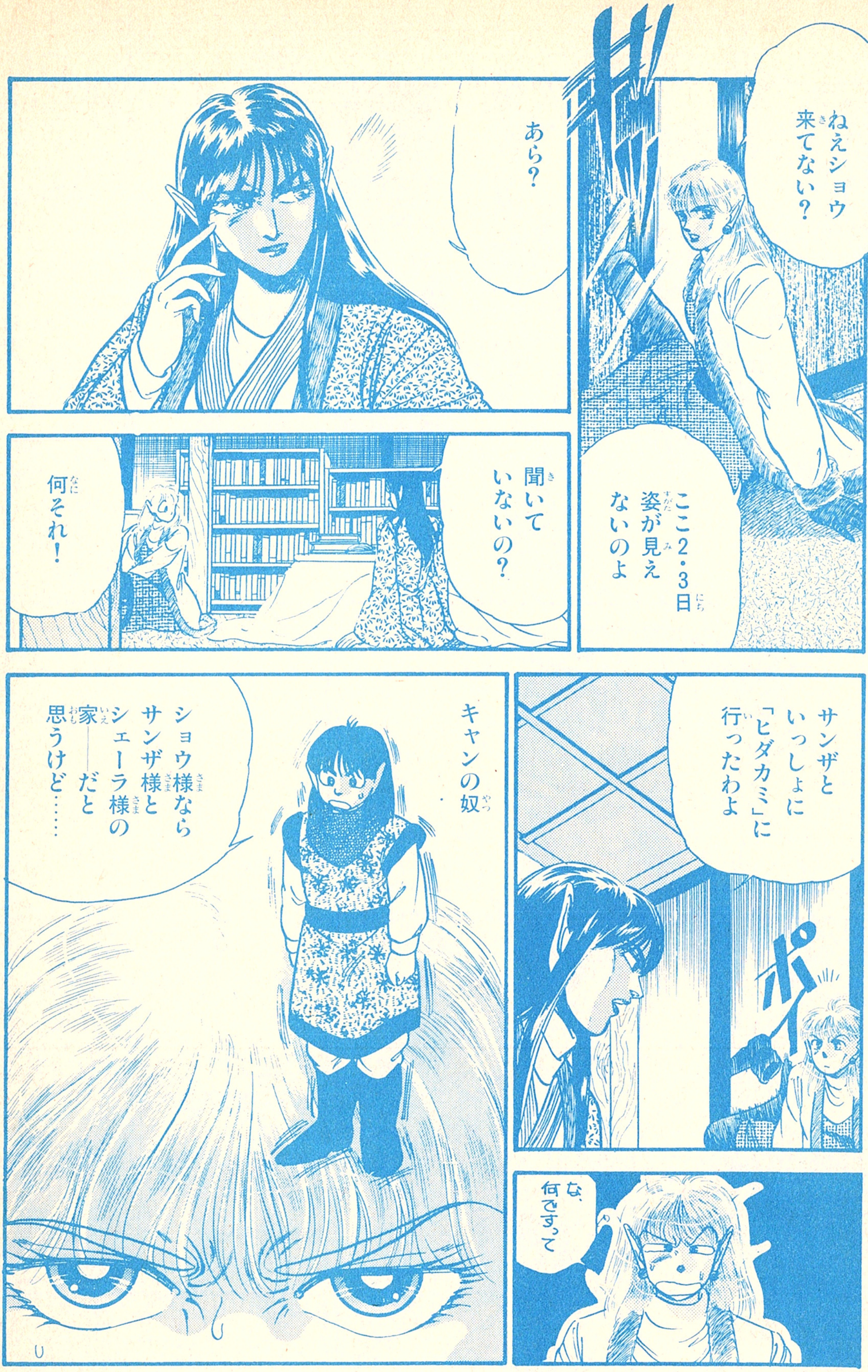

いや違うな
また洞窟の
一室だ
ええい！
一体いつに
なったら
塔の中に
入れるんだ
焦るな
焦っても
これが
焦らずに
おられるか
殿が所望
しておられる
のだ！
なのに我らは
この二週間
この洞窟から
抜け出れん
ではないか
剰さえ風聞を
耳にした
他国の輩も
入り込んで
いるのだぞ！
とに角今は
一部屋一部屋
しらみ潰しに
調べるしか
なかろう
……………


ギッ
帰るか
やむ得んな――
ゆらら

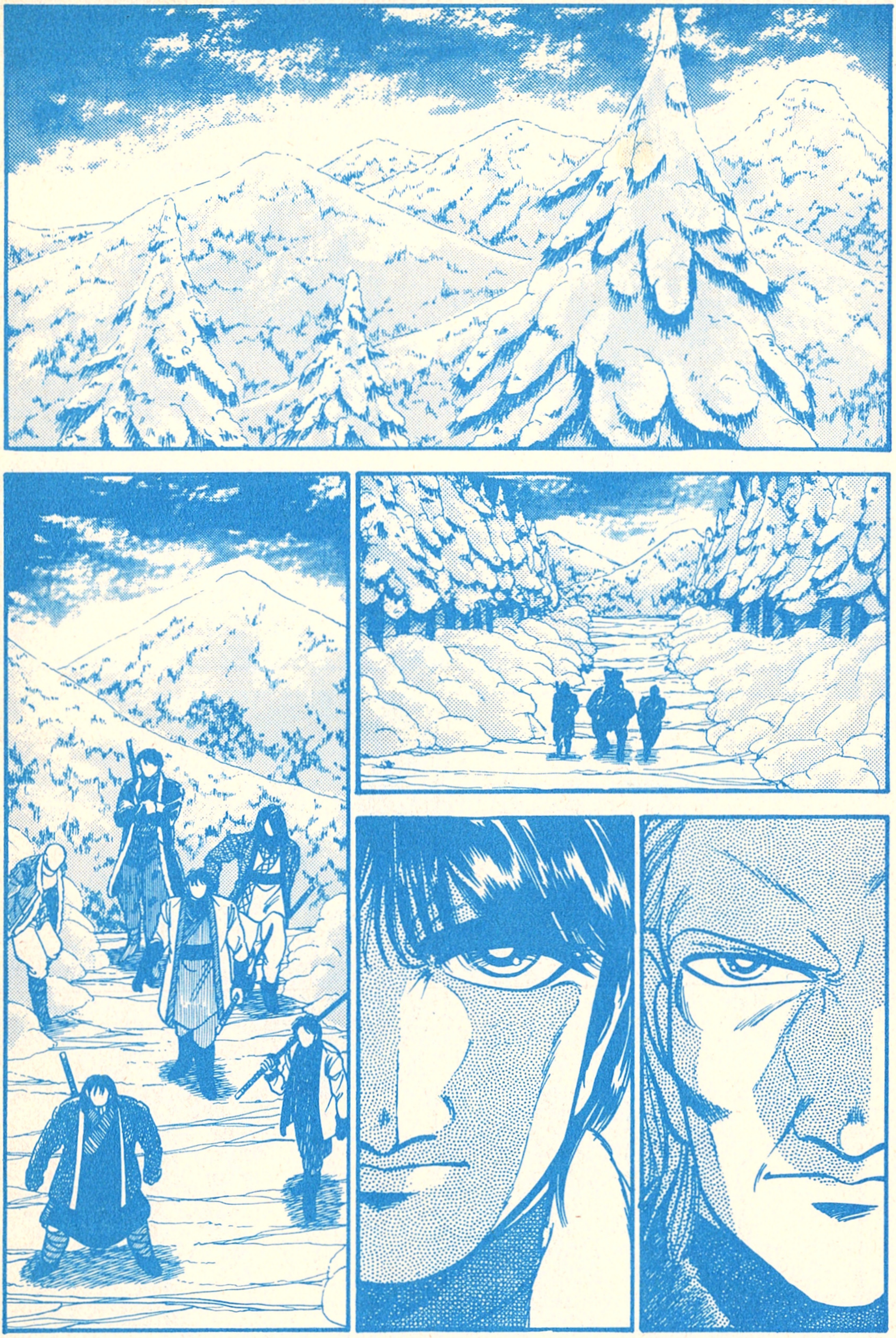

し、しまった！
緑龍（ガスドラゴン）だ!!


……
む……無念……
ドッ
ハッ


シェーラ！
シェーラ!!
ゼーッ
ゼーッ
ゼーッ


ねえショウ来てない？
あら？
ここ2・3日姿が見えないのよ
聞いていないの？
何それ！
サンザといっしょに「ヒダカミ」に行ったわよ
ポイ
キャンの奴
ショウ様ならサンザ様とシェーラ様の家――だと思うけど……
な、何ですって


新しい刀を手に入れて来るって
相変らず行儀ワルイわね
コタツっていいもんだわホウライの神秘ね
刀なら一本持ってるじゃない！
ショウは侍なのよ
ギルとの戦いで愛刀を失っているしね
そりゃそうだけどさア——
私も連れて行ってくれたって……



次号(Vol.5 2月16日発売)につづく!!

TO BE CONTINUED



Wizardry・II

小説ウィザードリィII

風よ。龍に届いているか

第9回

聖王家の血を受け継ぎし、唯一人の王族。
歳は十七、女の身にしてリルガミンの王。
精霊神に愛でられし美の化身。
闇色の瞳に、何を映すのか。
少女王ベイキの、思いは乱れる――。

作／ベニー松山
イラスト／高橋政輝

〔第九章〕謁見

謁見室に選ばれたホールは、広さが三十メートル四方はあるであろう御大層なところだった。

高い天井の中央には数百ものクリスタルをちりばめた巨大なシャンデリアが吊り下げられ、床は鏡のように磨き抜かれた大理石が敷きつめられている。壁に吊されている絢爛豪華なタペストリーの数々とともに、それらは復興期のリルガミン王国がどれほどの財力を有していたかを如実に表していた。

俺たちの立っているホールの入口からは、廊下の青紫の絨緞とは打って変わって深紅の厚い絨緞が正面に向かって伸びていた。その両側に衛士が五人ずつ、造り物のように微動だにせず向かい合っている。

絨緞の先に玉座はあった。

そして、周囲のタペストリーから抜け出てきたような盛装のベイキ女王がそこにいた。

いつもながら、俺はリルガミン聖王家の血の遺産に驚嘆した。

真珠のような、きめ細かな肌。金色の王冠と薄紫のベールの下からこぼれる栗色の髪。それにこの地方では類を見ない、黒曜石の如き謎めいた漆黒の瞳。

数千年にわたって精霊神グニルダに愛された王家の末裔に相応しく、その全てが気高く、美しい。貌立ちはまだ幼さを残していたが、もう数年もすれば――数年先にこの世界が存在すればの話だが――絶世の美女と呼ばれるようになるのは確実だった。

金糸で刺繍された赤いドレスに鮮やかな緑とピンクのケープを羽織り、大ぶりの玉座に埋もれるように座っていた若き女王は、俺たち三人が入口で一礼をすると同時にゆっくりと立ち上がり、精一杯の威厳を持って口を開いた。

「ようこそ、宝珠の探索者たちよ。もっと近くにお寄りなさい。そこでは話もしづらいでしょう」

俺たちはもう一度礼をした。一番慇懃に頭を下げたのはディーだったが、顔を伏せた瞬間に小さく毒づいたのを俺は見逃さなかった。

俺も同様の気分だったが、顔には出さずに玉座の前へと歩き出した。

ザザが続き、出遅れたディーは早足で進み出る。

左右に並ぶ衛士たちは、無表情に自分の正面の空間を睨んでいる。そ

前号までのあらすじ

精霊神グニルダの恩寵により、あらゆる外敵から守られ続けてきたリルガミン市。しかしその聖都も原因不明の天変地異に見舞われ、滅亡の一途を辿っていた。異変の原因究明のため王国は多数の冒険者を募り、街の北に聳える禁断の山〝スケイル〟に隠された神秘の宝珠の探索を命じた。

探索を続けて約一年。冒険者たちは自らの能力を磨き、山中の迷宮は宝珠の守護龍〝ルケブレス〟の護る最上層を残して全て踏破された。使命の達成は目前であった。そしてついに、主人公ジヴラシアのグループであるガッシュ、マイノスらの善のパーティが最上層の探索に出発したのだった。

しかし、不吉な予兆があった。死を告げると言う嘆きの精の出現と地震、スケイル山頂の奇怪な発光現象……さらにはジヴラシアのもとには人を堕落させる夢魔までもが現れた。

そして翌朝、一行は消息を絶つ。捜索隊が急き組織され、ハイランスの指揮する三隊の善のパーティが迷宮へと向かったのだったが――。

主な登場人物

- ●ジヴラシア……主人公。レベル13の忍者。悪・人間族。この物語の〝俺〟。
- ●ガッシュ……レベル15の戦士。中立・人間族。
- ●ザザ……レベル13の僧侶。悪・人間族。
- ●ディー……レベル13の女魔術師。悪・エルフ。
- ●マイノス……レベル12のロード。善・人間族。
- ●フレイ……レベル13の盗賊。中立・ホビット。
- ●ボルフォフ……レベル13の戦士。中立・ドワーフ。
- ●アルタリウス……レベル13の僧侶。善・ノーム。
- ●エレイン……レベル13の魔術師。善・エルフ。
- ●ハイランス……レベル13の侍。中立・エルフ。他のパーティを率いる。
- ●ベイキ女王……リルガミン王国の若き女王。
- ●〝ル ケブレス〟……迷宮を支配する龍。〝平衡の守護者〟。

れを横目で見ながら、あの女王もこのようにおとなしくしていれば、これほど冒険者に疎まれることもなかろうと俺は考えていた。
俺たち冒険者の間では、ベイキ女王はとんだ厄介者だった。
即位したのは確か二年前、わずか十五の時だったと聞いている。夭折した前王アラビク二世の一粒種で、リルガミン王家の唯一の血筋だ。
王国の統治者としては余りにも幼かったため、現在も行政の執行は賢者連中の議会に任されている。異変への対応が遅れたのは賢者たちがこの執務に追われていたせいもあったのだが、実際に彼らはよくやっていた。食糧の配給制の徹底や、近隣の避難民の受け入れ、そしてそれに伴う治安の強化など、天変地異のさ中で王国の基盤が破綻しなかったのは賢者連中の政策が的確だったおかげだろう。
惜しむらくは、冒険者の宝珠探策に関する全権をベイキ女王に認めたことだった。女王の強い希望があり、議会も無下に断ることはできなかったらしいが、それで俺たちは多大な迷惑を被ることになったのだ。
見ようによっては、彼女も賢者並に活躍したと言えるかも知れない。冒険者の宿の有料化に際しては百年前の文献から、ワードナ討伐時のトレボー城塞に存在した宿の料金表まで探し出し、俺たちが中立の水晶を手に入れた時には、わざわざ数日間も預けさせて何やら懸命に調べていたほどだ。
ただ、その手のおせっかいが俺たちの役に立った試しがないのだ。
王国の危機を救おうというのに寝泊まりに金を取られては、喜ぶ者などいよう筈もない。腹を立てていないのは馬小屋での宿泊を厭わないザザぐらいのものだ。
また、水晶を取り上げられたおかげで迷宮最上階の探策は足止めを食っていた。考えて見ればその数日の遅れが、ガッシュたちの消息不明という事態を引き起こしたのかも知れないのだ。
それ以外にも、この少女はあれこれと余計な口を挟んできた。そして少しでも気に入らないことがあれば、今俺たちが受けている王宮への形式ばった召喚と謁見を行い、王の権威と十七の小娘の理不尽な言い分で当たり散らすのだ。これがたまったものじゃあない。
迷宮よりも王宮のほうが宝珠探策の邪魔になるという陰口が聞かれるほど、冒険者の間でのベイキ女王の評判は悪かった。
俺たち三人は玉座の手前で、俺を中にして横一線に並んだ。
「ジヴラシア、ディー、ザザの三名、女王陛下のお呼びにより参上仕りました」
右に立つザザが、打ち合わせ通りに口上を述べた。俺が王室に対するへりくだった口のきき方という奴が苦手だからだ。
「御苦労でした」
女王が再び腰を下ろした。これで形式的な挨拶はおしまいだった。
沈黙が流れた。
おや、と俺は思った。いつもなら開口一番文句の一つもつけてくる女王にしては、妙におとなしい。
俺は改めてベイキ女王を見た。
女王は俺たちを見ていなかった。座った自分の膝頭の辺りに視線をやり、何かを思案している様子だった。
近くで見て初めて、俺は今日の女王がどこかしら大人びていると気づいた。そしてそれが女王の憔悴しきった雰囲気からくるものだと理解するのに、さほどの時間はかからなかった。
女王は王冠を象った錫を、両拳が白くなるほど強く握り締めていた。
「陛下？」
ザザの問いに、女王は驚いたように美しい顔を上げた。その拍子に緩んだ両手から、錫が滑り落ちる。
錫が絨毯越しに床にぶつかる音が、くぐもってはいたがやけに大きくホール内に響き渡った。
まるで、地の底から聴こえてくる亡者の鐘の音のようだった。
「あ――」
ベイキ女王の顔にはっきりと怯えが疾り、やがてそれは取り乱した自分への当惑の表情に変わった。
「いえ、何でもありません。少し考え事をしていました」
取り繕うように彼女は言った。俺たちは無言で、様子のおかしな女王

を見つめていた。
衛士から錫を受け取り、女王は気を取り直した。だが、滲み出す疲労感は拭い去れてはいない。
「――今朝早く、気になる噂を耳に入れました。何でもジヴラシア、あなたは昨夜……」
女王はそこで一度言葉を切った。そしてその続きを口にすること自体が苦痛であるかのように顔を歪め、大きく息を吸い込んだ。彼女は気づいていないようだったが、またも血の気が失せるほどきつく錫を握った右手が、小刻みに震えているのが見てとれる。
「嘆きの……嘆きの精を見たそうですね。それも、善のパーティが迷宮に向かうところを指し示したとか。これは、真実なのですか？」
弱々しい声で、彼女はようやく続けることができた。
正直俺は面食らっていた。
これまでに一度だって、この娘はこんな態度を見せたことはなかった。こちらが厭になるほど感情的になることはあっても、決して他人に自分の脆さを晒しはしなかったのだ。
「本当だ。俺は嘆きの精を見た」
俺の応えに右手奥の衛士がこちらに向き直り、目を剥いた。王室近衛の隊長らしく、手入れの行き届いた口髭をたくわえている。
「陛下の御前だぞ。口を慎むが良い！」
「構いません」
女王が力なく制した。衛士長は短く敬礼し、元の不動の姿勢に戻る。
「それで……ハイランス以下の三部隊が捜索に出発したとの報告も受けました。それは、つまり……パーティが壊滅――いえ、遭難したということなのですか？」
「確定した訳ではありません」
俺に代わってザザが応えた。「念視の僧侶呪文、探魂を用いましたところがガッシュ、ボルフォフ、マイノス、フレイ、アルタリウス、エレインの六名全員の反応はありませんでした。ですが、迷宮内の座標位置の念視ができないのです」
「どういうことです」
ベイキ女王がわずかに身を乗り出した。少なくともパーティが壊滅したのではないことを知り、力づけられたようだ。
「目下不明です。ハイランスたちが戻ればそれも明らかになりましょうが、恐らくは夜明け前の地震による魔法結界の力場の歪みが原因ではないかと」
「それでは、パーティに必ずしも不都合があった訳ではないのですね？」
女王はほっと安堵のため息をついた。
「そろそろ捜索隊が帰還する頃でしょう。陛下が御心配なさるほどのことではありますまい」
俺は横目でザザを見た。
柔和な笑みをたたえた端正な顔には、人に疑いを抱かせるものは微塵も感じられなかった。だが俺には、ザザが実際に予想しているよりも遙かに楽観的に物事を話していると判っていた。
よりにもよってベイキ女王の心痛を、少しでも和らげてやろうという肚なのだ。この男は、女にはやけに甘い。
「嘆きの精の言い伝えとて、今では当てになりません。このジブラシアも悪戯に陛下の御心を惑わせてはと、報告を差し控えた次第なのです」
口も巧い、と俺は心の中でつけ加えた。これでこの件に関して文句をつけられる心配もなくなったようだ。
まだ若干やつれた印象をまとわりつかせてはいたが、ベイキ女王は傍目にも判るほど生き生きとしてきた。よほどパーティの消息が気になっていたのだろう。いつもこの調子でいてくれたら、この貴婦人もさぞ可愛らしく見えるのだが。
「ありがとう。話を聞いて気が楽になりました。確かにその程度のことで私が気をもんでもしょうがありませんね」
ザザは無言で深々と頭を下げた。
「それでは陛下、我々はハイランスらの出迎えに向かいますので、これにて。心配はないとはいえ、我々の仲間のこととあってはやはり落ち着いてもいられません。詳細な報告はいずれ――」



ザザが言葉巧みに暇乞いを始めたその時だった。
背後の扉から慌てた様子の衛士が一人、ホール内に飛び込んできた。
先刻の衛士長が厳しく問いただした。
「何事だ」
「も、申し上げます」
その衛士はよほど急いだらしく肩で息をしていたが、それでもホールの隅々まで響く大音声を張り上げた。
「先ほどアルタリウス様、エレイン様のお二人が御帰還になりました。そして、アルタリウス様が女王陛下に早急にお目通り願いたいと」
「何だと！」
俺は思わず声を上げていた。ディーとザザ、それにベイキ女王も同時に、同じように訊き返していた。
「二人、とはどういうことです」
女王が俺たちを代表するかのように伝令の衛士に尋ねた。「二人が謁見を願い出て、残りの四人は宿にでも戻ったというのですか？」
「いえ、自分の受けた報告では――」
衛士は息を切らせ、続けた。「迷宮からお二人だけが出て来られたとのことです。また、エレイン様はお身体の具合が芳しくなく、直接冒険者の宿にお戻りになりました」
女王を含めて、俺たちはしばらくの間言葉を失っていた。
迷宮内でパーティを組んでいる六人が離散するなど、通常考えられない事態だった。しかもそのうちの二人――それもパーティ中で唯一転移の呪文をマスターしているエレインと、治療呪文の要であるアルタリウスがすでにリルガミン市内に戻ってきてしまっているのだ。
残りのガッシュたちの中に、魔術師系呪文の使い手はいない。ロードのマイノスは僧侶系呪文をある程度習得しているが、これも五レベルまでで使用回数とともに僧侶のアルタリウスには到底及ばない。この状態で連中がまだ迷宮内を彷徨っているとしたら、無事に脱出できる確率は恐ろしく低いだろう。
いくらガッシュたちが岩をも砕く剛剣を持っていても、強力な攻撃呪文の使い手がいない限りパーティ単位の集団戦では勝ち目はない。魔法なしには捌ききれぬ数の魔物にたかられて麻痺毒を受ければ、治療の手段がない限りそれで死んだも同然となるからだ。そして梯子山の迷宮には、多脚甲虫を始めとしたその手の有毒生物がうようよしているのだ。
ホールの重苦しい雰囲気をかろうじて破ったのはベイキ女王だった。自分の報告がもたらした空気に戸惑う衛士をきっと見据えると、彼女はできる限り声の震えを押さえて命令した。
「ここに、すぐにアルタリウスを通しなさい。直接話を聞きましょう」
「はっ、只今――」
いうなり飛び出して行った衛士が、アルタリウスを従えて再びホールに入ってきたのはそれから二分と経たぬうちだった。が、俺たちにはそれがやけに永く感じられた。
矮小なノームが女王の謁見室に現れた時、恐らくその場にいた全員が息を呑んだか、呻き声を上げた。
酷い姿だった。
自慢の長い顎髭は、元が白であったことが判別できぬほど黒ずんでいた。ところどころに固まった血がこびりつき、髭を汚らしく縺れさせている。
灰色の地味な法衣にも血の斑点が撒き散らされていた。それが迷宮の怪物の返り血なのか、それともパーティの仲間のものであるのかは判らなかったが、法衣のあちこちの破れ目を見ると少なくとも半分以上はアルタリウス自身の血であろうと思われた。
頭部にも手酷い傷を受けたらしく、薄くなった頭髪がべったりと血に固められている。ただ、傷はすでに呪文で治療したのか、見てとることはできなかった。
天変地異で住処を追われた避難民の中の、物乞いと見紛うばかりのみすぼらしさと痛ましさだった。
だが、物乞いとは決定的に違うところがアルタリウスにはあった。
それは、眼だった。何かに憑かれているような、異様な目線だ。
鋭く、精気に溢れてはいるが、どこかが醒めている。

一瞬視線を交わした俺の背に、ぞくりと怖気が這い上ってきた。頭部の傷の後遺症で、アルタリウスはすでに正気を失っているのではないかと思ったほどだ。

満身創痍のノームは、しかししっかりした足取りで赤絨緞の上を歩き始めた。

近づいてくるアルタリウスを見つめながら、俺たちは一言も声を発せずにいた。

確かにこいつはアルタリウスだ。それは間違いない。

だが、どこかに違和感があった。あの眼は何かがおかしい。

「親愛なる女王陛下、大変な報告がございます。王国の存亡をかけた、大事なお知らせです。お人払いを、お人払いを――」

道化の口上を思わせる節で、アルタリウスはすたすたと歩いてくる。

「止まりなさい」

ノームの様子に尋常ならざるものを感じ取り、女王は命令口調で言った。が、それを無視してアルタリウスはそのまま歩き続けている。

その不気味さに、女王はヒステリックに叫んだ。

「誰か、その男を止めなさい！それ以上近づけてはなりません！」

女王の命令を受けて、絨緞の両側に控える衛士の、入口からも玉座からも三人目になる二人が数歩前に出た。そして引き抜いたサーベルを絨緞上に突き出して組み合わせ、アルタリウスの進路を塞ぐ。俺たちの後方十メートル辺りの、丁度ホールの中央付近だ。

サーベルの刃はノームの進んでくる方向、つまり入口側に向けられている。そのまま進めばアルタリウスは軀を刃に押し当てることになる。

しかし研ぎ澄まされた刃を見ても、アルタリウスは一向に臆した風ではなかった。

「何のつもりでございましょうか、陛下。私の軀に刃が吸い込まれるさまをお望みですかな。ならばお見せしましょうぞ。その後で二人でゆっくり話しましょうぞ」

「止まりなさい！」

恐怖に駆られた女王が絶叫したのと、ふいにアルタリウスが走りだしたのは同時だった。

それも、交差したサーベルに向かってだ。

ずんぐりしたノームとは思えぬ、凄まじい加速だった。

二人の衛士がそれと気づく前に、サーベルの刃はアルタリウスの髭を切り裂き、首の両脇をえぐっていた。

首が切断されなかったのは、勢いに押されて交差が外れたためだった。だが、刃は確実に頸動脈に届いていた。

「ひっ」

「何を――」

驚愕した衛士二人がサーベルを引き抜く。

が、血は一滴も噴き出さなかった。

そしてまた、致命傷を受けた筈のアルタリウスも倒れなかった。

爛爛と光る目が、俺の背後で声もないベイキ女王を凝視していた。

「御満足頂けましたかな」

喉の傷口から空気が漏れ、しゅうしゅうと掠れた声でそいつは優しく囁いた。「では、私めの用件をば。簡単なことです。陛下にも、仲間になって頂きたいのですよ――」

にたりと嗤いながら、そいつは両手でみりみりと首の傷を引き裂き始めた。

遅まきながら、俺はあの眼に感じたものの正体を知った。

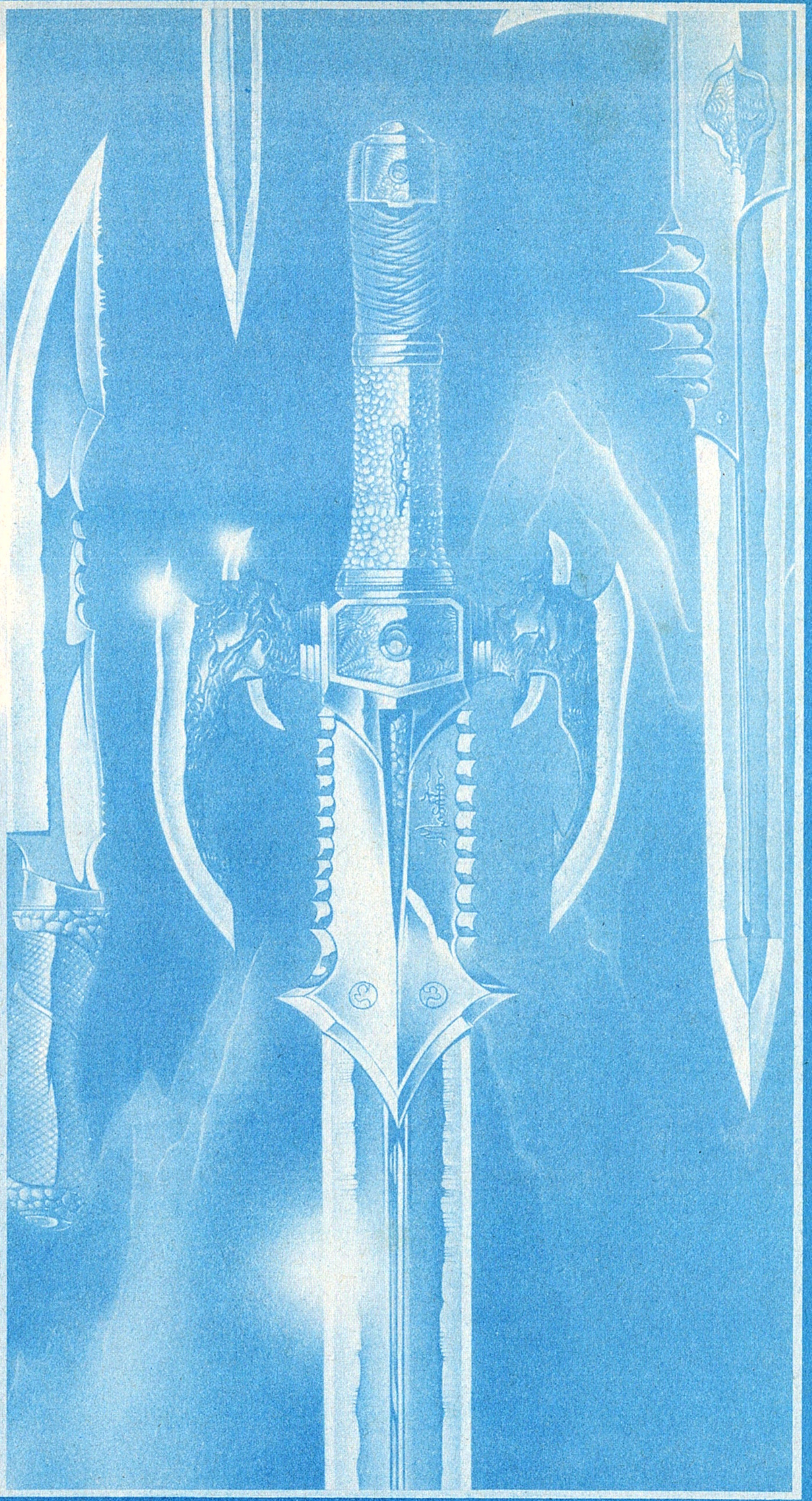
既知の生物ではないのだ。俺がいまだに知らぬ魔性の眼だ。

俺とザザ、ディーが三方に散ると同時に、アルタリウスだったものは自らの頭部を引きちぎった。

（次号につづく）

特報!!
ウィザードリィ外伝①ギルの迷宮
単行本化決定!! 2月下旬発売予定

●確実に手に入れたい方は予約注文書(アンケートハガキについています)に記入してお近くの書店に渡して下さい。



●コミック版
ウィザードリィ外伝
鳳凰の塔
作／石垣環

●小説ウィザードリィII
風よ。龍に届いているか
作／ベニー松山
イラスト／高橋政輝

▶コミック版ウィザードリィ外伝・鳳凰の塔は反対ページ(P80)からお読み下さい。